

SONIC CITY

SONIC CITY

2021 SERIES

6:00pm, May 14th (FRI),
2021 at Sonic City

125

ソニックシティ 2021 シリーズ 第 125 回さいたま定期演奏会
2021年 5月14日(金) 午後6時開演／ソニックシティ 大ホール

第 125 回さいたま定期演奏会 日本フィルハーモニー交響楽団

「教科書に載っているクラシックの名曲たち」

ビゼー：《アルルの女》第2組曲より“ファランドール”（約5分）

Georges BIZET: 'Farandole' from "L'Arlésienne" Suite No.2

グリーグ：劇音楽《ペールギュント》より「朝」「山の魔王の宮殿にて」（約8分）

Edvard GRIEG: 'Morning' 'In the Hall of the Mountain King' from "Peer Gynt"

ブラームス：ハンガリー舞曲第5番 ト長調（約3分）

Johannes BRAHMS: Hungarian Dance No.5 in g-minor

エルガー：行進曲《威風堂々》第1番 二長調 op.39（約7分）

Edward ELGAR: Pomp and Circumstance No.1 in D-major

～休憩20分～

シベリウス：交響詩《フィンランディア》op.26（約9分）

Jean SIBELIUS: "Finlandia"

チャイコフスキー：交響曲第4番 ヘ短調 op.36より第4楽章（約10分）

Pyotr TCHAIKOVSKY: 4th movement from Symphony No.4 in f-minor

指揮：西本智実

Conductor: NISHIMOTO Tomomi

コンサートマスター：扇谷泰朋 [日本フィル・ソロ・コンサートマスター]

Concertmaster: OGITANI Yasutomo, JPO Solo Concertmaster

主催

公益財団法人埼玉県産業文化センター／さいたま市

公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団

後援

埼玉県／埼玉県教育委員会／さいたま市教育委員会／埼玉県吹奏楽連盟

特別協力

盆栽 清香園



【ソニックシティホール棟改修について】

ソニックシティホール棟は、令和3年（2021年）7月3日から令和5年（2023年）2月3日（予定）まで大規模改修のため休館いたします。そのため、9月の第127回定期演奏会より埼玉会館大ホールにて開催します。詳細情報については、ソニックシティHPをご覧ください。

【アンケートのお願い】

今後のソニックシティ主催公演の参考のため、アンケートへのご協力をお願いいたします。アンケートにお答え頂きました方の中から抽選で3名様に、出演者のサイン色紙をお送りいたします。



ゆったりシートで！クラシック♪

「ハッピー♡ジャズヨコス公演」

～お客様同士の距離を十分に確保し、安全・安心なコンサートを目指します～



©塩澤秀樹



指揮：西本智実

指揮者・総合舞台演出家。

世界約30カ国の各国を代表するオーケストラ・名門国立オペラ劇場・国際音楽祭より招聘。

世界経済フォーラム「2030年イニシアティブ」に取り組むヤンググローバルリーダー、Fondazione pro Musica e Arte Sacra「名誉賞」、広州大劇院名誉芸術顧問、大阪国際文化大使、ヨーロッパ文化支援財団(EUFSC)指名指揮者、慶応義塾大学SFC研究所上席所員(音楽科学・舞台芸術科学)ほか。

2015年(G7エルマウ・サミット)2016年(G7伊勢志摩サミット)における日本国テレビCMに起用。CNNインターナショナル(TV)、ZDF(WEBSITE)、ゲーテ・インスティトゥート(WEBSITE)、独仏共同TVテレビアルテ(TV/2020年収録済)他ドキュメンタリーで紹介されるなど、その動向は常に世界から注目を集めている。

内閣官房国家戦略室より「国家戦略担当大臣サンスレーター」。

芸術監督としての舞台演出・指揮した『泉涌寺音舞台』は【ニューヨークUS国際映像祭 TVパフォーミングアーツ部門銀賞】【ワールドメディアフェスティバル ドキュメンタリー芸術番組部門銀賞】を同時受賞するなど受賞多数。



今回の演奏会、「教科書に載っているクラシックの名曲たち」というタイトルが付けられている。といっても、それぞれの曲の内容や成り立ちを見てゆくと、「教科書的」という言葉で想像される「お行儀のよい」ものばかりではない。

冒頭に演奏される『アルルの女』からしてそう。許嫁のいる身でありながら、「アルルの女」に一目惚れした主人公が、様々な嫉妬心に駆られて自殺する、という衝撃的な内容の劇作品だ。フランスのドーデ（1840-97）が書いたこの作品に曲を付けたのが、後にオペラ『カルメン』で名を馳せるビゼー（1838-75）。『ファランドール』は、景気のよい響きとは裏腹に、許嫁との結婚式の最中、嫉妬のあまり主人公が身投げをする大詰めで演奏される。

『パール・ギュント』も、元々はノルウェーのイブセン（1828-1906）の作った劇作品に、グリーグ（1843-1907）の書いた音楽が付けられた。奔放な性格の主人公パール・ギュントが放浪の末、尾羽うち枯らして故郷へ戻るという内容で、『山の魔王の宮殿にて』は、一山当てることを狙った主人公が、異界で散々な目に遭う場面、『朝』はその後見事に大金を手にした主人公が、モロッコの海岸で豪華な朝の宴を催す場面で演奏される。（なお本日は、『朝』、『山の魔王の宮殿にて』という曲順である。）

ブラームス（1833-97）は、ドイツ音楽の王道を行くような深刻な雰囲気を湛えた大作を書いた作曲家、というイメージが強いが、それだけではない。彼も狭い世界の中だけに安住することをよしとせず、異世界との交流を積極的におこなった。放浪時代をともにした友人のヴァイオリニストの紹介で知った、ハンガリーのロマの民族音楽を基に書かれた『ハンガリー舞曲集』もその表れ。本日はその中から、第5番をお聴きいただく。

イギリスのエルガー（1857-1934）が作曲したオーケストラのための行進曲シリーズ『威風堂々』の、特に「第1番」もそう。この曲の有名な中間部は、初演当時から話題を呼び、時のイギリス国王エドワード7世（1841-1910）の示唆を受け、新たに歌詞を付けて『希望と栄光の国』という愛国歌として、さらに親しまれることとなった。

シベリウス（1865-1957）の故郷フィンランドは、彼の青春時代には実質的にロシアの支配下に置かれていた。そうした状況の中、フィンランドの自立を目指し、当局の政策に対する反体制的な活動が高まってゆく。交響詩『フィンランディア』も、まさにそうした中で作られた作品であり、ロシア側からの上演禁止の圧力を潜り抜けて演奏され続け、後のフィンランド独立へのうねりを音楽の力によって支えた。

ロシアのチャイコフスキー（1840-93）による『交響曲第4番』は、結婚生活が破綻し、自殺未遂にまで追い込まれた彼が、みずからの再起をかけて書いた作品。メロディ・メーカーとして定評のあった彼に相応しい旋律の豊かさと、ドイツ風の交響曲に見られる堅固な構造とが結び合わされた傑作である。交響曲の結論部分である第4楽章は、過酷な運命に打ち勝ったかのような音楽がメインだが、その合間に憂いを帯びた楽想が顔を覗かせたり、運命の一撃を思わせる部分が出現したり。一筋縄ではゆかない内容となっている。

新機軸の演奏会から考える オーケストラの歴史⑤



シュヴァント画『交響曲』、1852年作成。ベートーヴェンの交響曲が演奏されているイメージが描かれているが、楽器配置や編成の多種多様を見ると、雑多な曲目を並べた演奏会の名残を彷彿させる。

今回の演奏会のプログラム構成だが、いわゆるクラシック音楽のオーケストラのコンサート、しかも定期演奏会という点から眺めると、異例づくめかもしれない。何しろそうした演奏会では、交響曲に代表される大曲がど〜んと置かれるのが通例のところ、小品ばかりが並んでいるからだ。一見すると、プロムナードコンサートあるいは名曲コンサートのように、定期演奏会というカテゴリーにはそぐわないようにも思えてしまう。

だが、逆に現在私たちが考えているような定期演奏会の曲目構成、つまり大曲をメインにプログラムを作る…という姿勢自体が、じつは西洋音楽の歴史の中でたかだか1世紀程度のものにすぎないのだ。たとえばモーツァルトが生きていた18世紀後半、あるいはベートーヴェンが生きていた19世紀前半の演奏会…その中には現在のオーケストラの定期演奏会にあたるものも少なからず存在する…のプログラムを見ると、いわばお好み弁当のように、種種雑多な曲が並んでいたことが分かる。

それこそ交響曲については、それぞれの楽章をばらばらに取り上げるのが当然と言わんばかりに、第1楽章を演奏会の開始時に、最終楽章を演奏会の終了時に演奏。かと思えば、流行のオペラから話題のアリアが歌われたり、腕利きのゲスト奏者を招いて協奏曲の一部の楽章を奏でてもらったり。場合によっては、元々オペラや劇の幕開けに演奏されるべき序曲が、演奏会の最後に置かれるといった場合もあった。つまり、それだけ融通無碍だったということ。

ところが19世紀半ばになると、状況は変化を遂げてゆく。典型が交響曲である。たとえばベートーヴェンのそのように、作曲家のメッセージを満載し、既存の宗教に替わる感動を聴き手にもたらすジャンルとして神聖視され、全曲が切れ目なく演奏されるようになる。以前であれば普通だった楽章間の拍手も禁物となり、それを恭しく聴くことが礼儀と化す。結果、それを演奏するオーケストラの演奏会自体が、ある種神聖な儀式のようになり、交響曲に比重を置いたプログラムが組まれてゆく。ましてやそれが、オーケストラにとっての重要な顔ともいえる定期演奏会であればなおさらのこと。

だからこそ、そんな固定観念を突き破る今回の演奏会の曲目構成は、ひときわ目を引く。コロナ禍の中で、新機軸の演奏会のあり方が模索されている現代に、これほど相応しいものもない。

盆栽清香園より第125回定期演奏会に寄せて

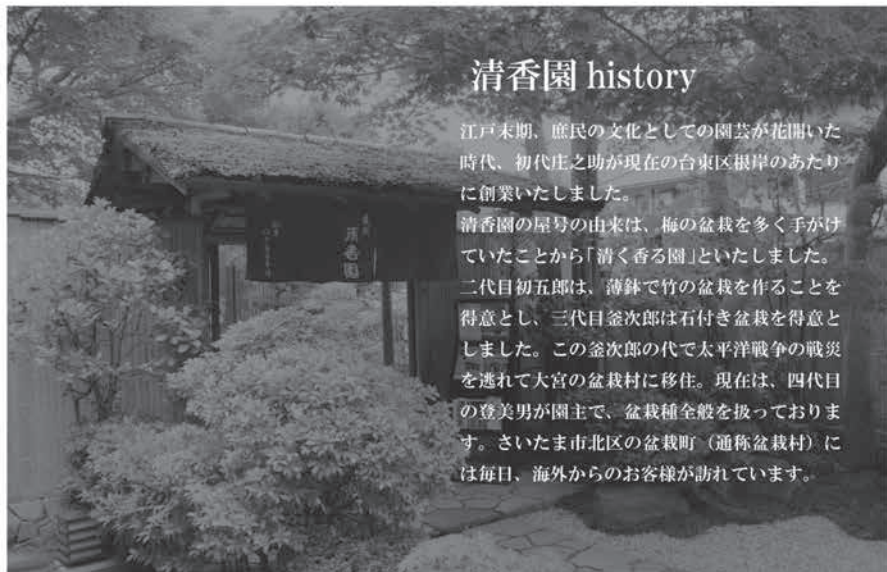
この度は、第125回定期演奏会の開催を心よりお慶び申し上げます。
「教科書に載っているクラシックの名曲たち」がここ大宮の地で奏でられるにあたって、さいたま市を代表する文化「盆栽」とのコラボレーション展示をさせていただきますことを光栄に感じております。

盆栽の展示作法の一つに「流れ」がございます。樹形が右に傾いているものを「右流れ」。左に傾いているものは「左流れ」といいます。この度の演奏会では「右流れ」のイワガラミの花物盆栽をステージ左側に展示し、「左流れ」の黒松を右側に展示いたしました。華やぎと趣のある空間を心がけ、左右の盆栽が舞台中央に光を求めて枝が伸びるような情景を演出させていただきました。

オーケストラの躍動感のある音色と盆栽が表現する空間演出とのハーモニーをお楽しみ頂けましたら幸いです。

清香園 山田寅幸





清香園 history

江戸末期、庶民の文化としての園芸が花開いた時代、初代庄之助が現在の台東区根岸のあたりに創業いたしました。

清香園の屋号の由来は、梅の盆栽を多く手がけていたことから「清く香る園」といたしました。

二代目初五郎は、薄鉢で竹の盆栽を作ることを得意とし、三代目釜次郎は石付き盆栽を得意としました。この釜次郎の代で太平洋戦争の戦災を逃れて大宮の盆栽村に移住。現在は、四代目の登美男が園主で、盆栽種全般を扱っております。さいたま市北区の盆栽町（通称盆栽村）には毎日、海外からのお客様が訪れています。

お客様に一番身近な「窓口」としての 専門店を目指して

盆栽園という枠組みに捉われず、
お客様に寄り添う専門店を実現していきます。



世界が認めた光学技術

タムロンは、写真レンズをはじめとする各種光学製品を開発・製造する、総合光学機器メーカーです。高い技術力により開発された製品は、世界中の国で高く評価されています。さいたまの地が育んだ先進の光学技術で、私たちはこれからも、さまざまな分野で「産業の眼を創造貢献」し続けます。



主な取扱い製品

一眼レフカメラ用交換レンズ、ミラーレスカメラ用交換レンズ、ビデオカメラ用レンズ、デジタルカメラ用レンズ、ドローン用レンズ、各種光学用デバイス部品、監視カメラ用レンズ、FA/マシンビジョン用レンズ、車載用レンズ、カメラモジュール、原器等

TAMRON

株式会社タムロン

〒337-8556 埼玉県さいたま市見沼区蓮沼1385番地 <https://www.tamron.co.jp>